■（１３４）天声人語への「指摘」増は、書き写し効果？

朝日新聞１面のコラム「天声人語」には署名がない。筆者が交代した時には紙面で紹介されるが、一般的には「天声人語子」と呼ばれ、顔は見えない。どんな記者か。母校の高校生１０人が、人物像に興味を持ちながら新聞社を訪ねてきた。それに応じて現れたのは柔和な顔の５７歳の小柄な男性だった。

複数の朝刊とテレビニュース、情報番組をみて世の中の動きをつかんでテーマを考える。出勤するまでに定まっている日は半分くらい。締め切り直前までテーマ選びに悩み、言葉遣いや表現方法を考える……。普通の記事と同じように、その日暮らしで、ウンウンうなりながら書いているとの「告白」に高校生は聴き入った。話題は「書き写しブーム」にも発展した。筆者の言う反響は「表現や言葉の使い方への疑問や指摘が増えた」。書き写すことで細かく考えながら読む人が増えたためらしい。使った言葉がどう受け止められるかは、読者によって異なる。会話とは違い、文字だけで人に真意を伝える難しさが語られた。

小欄と天声人語の共通点は、好きなテーマで自由に書くことができること。こちらが勝手に共感するのは「相当悩みながら書いている」状態。例え週に１回でも、同じです。（山）